

フランスの地方都市における音楽祭についての考察

— パミエ市『ガブリエル・フォーレ生誕地音楽祭』と国際交流 —

Les réflexions sur le festival régionale en France

— “Musiques au Pays de Gabriel FAURÉ” de Pamiers et Les échanges internationaux —

鎌田 直純

KAMATA Naoyoshi

(和歌山大学教育学部)

キーワード：音楽祭 アソシエーション 国際交流

はじめに

私は2003年9月に、日本フォーレ協会のメンバーとして、フランスのパミエ市における音楽祭に参加した。パミエ市は近代フランスで最も重要な作曲家の一人、ガブリエル・フォーレ(1845～1924)の生誕地であり、毎年彼を記念した音楽祭が催されているのである。そこで、フランスの地方都市での音楽祭がどのように運営されていたかの一例を、演奏家として参加した体験をもとに報告したい。また、この音楽祭をモデルにすることによって一地方都市における音楽祭のあり方、また文化レヴェルでの国際交流のあり方を探ってみたい。

1. パミエ市について

パミエ市はフランスとスペイン国境に横たわるピレネー山脈の麓アリエージュ県にあり、人口15,000人ほどの小都市である。フランス南西部の都市トゥールーズから電車で1時間あまりの場所にある。トゥールーズは航空機産業を主として商工業の中心地、交通の要で、人口35万人ほどのフランス屈指の大都市である。世界的にも有名なオペラ劇場を有し国際音楽コンクールも名高い。現在ではパミエは航空機産業の部品を作る工場が主産業であり、トゥールーズの経済圏に属する存在であるといえるだろう。

2. ガブリエル・フォーレ生誕地音楽協会

L'association musique au pays de Gabriel Fauré
の成り立ち

フォーレの生誕150年である1995年にフォーレの

業績を讃え、アソシエーション法 Association Loi (1901年成立)に基づき彼の作品の演奏会を企画することを目的に発足した。年に何度か催される音楽会はフォーレの作品だけではなく彼の弟子や同時代の作曲家の作品も演奏される。フォーレを記念した演奏祭を催すことで、歴史や建造物も含めたパミエの文化の象徴として街を活性化することも意図されているようだ。(以下フォーレ生誕地音楽協会と記す)

3. 日本フォーレ協会 La société Fauré du Japon について

池内友次郎、安川加壽子をはじめ、フランス音楽、特にフォーレの音楽に強い関心を持つ数名の音楽家有志により、1989年に、音楽学者、演奏家、作曲家などが中心になって日本フォーレ協会が結成された。以来、フォーレの業績をたたえ、フランス音楽、フランス文化の研究と普及を目的として、活動を続けている。活動内容の3本の柱は、(1)フォーレ作品を中心とした演奏会を年1回開催し、(2)内外から講師を招いて年3～4回の研究会(講演会、公開レッスンなど)を行い、(3)会誌フォーレ手帖を年1回刊行している。現在、会長は遠山一行、会員数はおよそ200名にのぼる。

4. 音楽祭に参加することになった経緯

1999年、当時は日本フォーレ協会の会員ではなかった長岡晴子氏がパミエを訪ね、フォーレ生誕地音楽協会会長のダルディーニャ氏と知り合った。そこで協会が毎年数回演奏会を含むフェスティバルを開催していることを聞き、後に会員となった彼女がそのこ

とを日本フォーレ協会で紹介した。その後2000年松橋麻利会員がパミエを訪れ、ダルディーニャ氏に日本フォーレ協会の存在を伝えた。さらに2001年に藤堂雍子、末永理恵子会員が訪れた。毎年の日本からの訪問をうけ、パミエの協会では日本フォーレ協会に対する関心が高まり、協会同士の交流をはかろうという話になった。そこで、パミエがわでは日本から演奏家を招待して音楽祭で演奏してもらおうという計画が持ち上がった。その話が日本フォーレ協会の総会で紹介されると、日本フォーレ協会からも、ぜひパミエへ演奏家を派遣しようということになった。

5. 音楽祭までの経過

2001年パミエを訪れた数人の日本フォーレ協会の会員が「パミエ演奏会小委員会」を組織した。2002年の春にはダルディーニャ氏に、フェスティバル参加を申し出る手紙を出した。後日彼から快諾の返事が届き、検討の結果、声楽とピアノ独奏でプログラムを構成して演奏家を派遣することとなった。派遣者はソプラノの秋山理恵、バリトンの私、ピアノ伴奏の須江太郎、ピアノ独奏の井上二葉の4名の演奏者、さらに作曲家の末吉保雄、事務局から高木幸三（ピアノ）、中村浩子（声楽）、小委員会からは金原礼子（フランス文学、実際には不参加）、末永理恵子、松橋麻利（音楽学）の6名が随行、計10名となった。せっかくフランスに行くのだからということで、パリでも演奏会を持つことにしようということになり、紆余曲折があったが結局、筆者が交渉して「日本大使館・広報文化センター」で実現することになった。このセンターは学術的な講演会や、シンポジウム、音楽会や日本の伝統芸術の紹介など積極的に行っている場所である。また、パリまでの渡航費用は日本の参加者側が持つことになっていたため、並行して12月には国際交流基金 Japan Foundation へ助成金の申請をし、年が明けて2003年、助成が決定した。これによって、参加者の経済的負担が少し軽減された。

6. 曲目の選定

この音楽祭はフォーレを記念したものなので、それぞれの演奏家がフォーレの作品を演奏することは前提であったが、その他にフォーレ以外のフランスの作品、そして邦人作曲家の作品を入れることになった。邦人作品を入れたのは、近代から現代にかけての日本の音楽を直にフランス人に聴いてもらいたいという気持ちがあったからだ。ヨーロッパで、日本の伝統音楽が紹介される機会は少なくないが、日本の現代の音楽となると、希である。このような機会に、日本の現代の音楽の一面を知ってもらおうのは重要なことであろう。し

たがって、曲目は以下のように構成された。

《プログラム》

- ①ソプラノ独唱 秋山理恵、須江太郎ピアノ
フォーレ：夢の後に、秋、ひそやかに
- ②バリトン独唱 鎌田直純、須江太郎ピアノ
フォーレ：リディア、月の光、やるせない
恍惚
- ③ピアノ独奏 井上二葉
フォーレ：夜想曲第7番、作品74、
作品84-6、作品84-7
- ④二重唱 秋山理恵、鎌田直純、須江太郎ピアノ
フォーレ：黄金の涙
- ⑤ピアノ独奏 井上二葉
武満徹：さえぎられない休息 瀧口修造の
詩による
- ⑥ソプラノ独唱 秋山理恵 須江太郎ピアノ
山田耕筰：からたちの花／
別宮貞雄：さくら横ちょう
- ⑦バリトン独唱 鎌田直純、須江太郎ピアノ
末吉保雄：歌曲集《ある日の歌》より
1 たそがれ 3 かくれんぼ
5 水のたたえの 7 早春
- ⑧ソプラノ独唱 秋山理恵 須江太郎ピアノ
デュパルク：悲しき歌、旅への誘い、
戦争が起こっている国に
- ⑨ピアノ独奏 井上二葉
ロジェ-デュカス：アラベスク第1番
- ⑩バリトン独唱 鎌田直純、須江太郎ピアノ
ラヴェル：《デュルシニアに心を寄せる
ドン・キホーテ》 1 ロマネス
クナ歌 2 叙事的な歌 3 酒歌

7. 日本フォーレ協会の日程（フォーレ生誕地音楽協会による）

フォーレ生誕地音楽協会がわれわれの訪問に対して用意した行事のメニューを記しておこう。

第1日目（9月25日）

- 朝食後、地元TV放送局による練習風景録画と取材
10:00 出発
10:30 モンゴズィ（教会と公園、フォーレの胸像）フォーレが幼少の頃過ごした場所である。
12:00～14:00 昼食《Forge de Pyrène》
14:45～16:15 ニノの先史時代の洞窟探訪
パミエに戻る
21:00 映画館《Rex》日本映画祭 Stupeur et

Tremblement (自失と震え) 監督アラン・コルノー

く痛んではいたが、礼拝堂の静謐の中で美しい音楽が耳に聞こえたような気がした。

第2日目 (9月26日) 演奏会当日

10:00 ロラン・クレー氏の案内によるパミエ市観光
11:30 フォーレの胸像に献花、市庁舎での歓迎レセプション
13:00 当地フォーレ協会による昼餐会
17:00 クリスティヌ、ベルナール・ロージ夫妻の案内による聖アントナン教会のオルガンとカリヨン見学
21:00 演奏会 (ノートル-ダム・デュ・カン教会)



第3日目 (9月27日)

10:00 パミエ市内散策 教会周辺に日曜日の午前中に立つ市 marché の見物～我々を取材していた地元新聞社 Journal de l'Ariège のオフィスへの訪問

コンサート、そしてそのリハーサル以外に用意していただいた行事は盛りだくさんであった。そこにはパミエとその周辺を丸ごと知ってほしいという主催者の願いが反映されている。それなりの歴史を持った街ではあるが、国際的に認知度は低い。フォーレの生誕地ということも、いままでそれほど関心を強く持たれていたわけではない。そこでフォーレの生誕地というだけでなく、自然、歴史も含めて、音楽祭を盛り上げて街を活性化させようという意気込みがある。メニューのなかで、洞窟探訪はかなり身体が冷えるであろうことが予想され、コンサート前夜であるということでキャンセルさせていただいた。

〈地元 TV 放送局による取材〉

夕方の TV ニュースのためリハーサル風景の録画とインタビューが行われた。

〈モンゴズィ〉

1849～54 モンゴズィの師範学校にフォーレの父親が校長に任命され、フォーレの一家は家族で住んだ。美しいフォワ城を見渡せる高台にある師範学校は、現在は大学の研修施設のようなものになっているのだが、フォーレが住んでいた頃の建物自体は残っている。庭にはフォーレの胸像が建っていた。裏手の礼拝堂にはハーモニウム Harmonium (リード・オルガン) があり、幼少期のフォーレはこの楽器に親しんでいたらしい。私たちが訪れたときにも、大体同時期の楽器が置いてあり、弾いてみるともう鳴らない音もあるほど古

〈昼食〉

地域の交流センターのようなものだろうか、明るい光と自然に囲まれていて、地元の人たちが集まって楽しそうににぎやかに食事をしていた。土地の自慢料理、鹿の赤葡萄酒煮をいただき、やはり地の葡萄酒も南仏らしいコクのある味わい深いものであった。

〈TV ニュース〉

ずっと私たちを取材していたニュースが放送された。短く編集はされていたが、翌日の演奏会を大きな話題として取り上げていた。

〈パミエ市内観光〉

歴史に詳しいクレー氏の案内でフォーレの生家、カメル修道院、聖アントナン教会、また街の中心のカステッラの丘に登り、街を360度見渡した。古い町並みとともに、アルミニウム合金等の工場もあり、この地域の新しい時代との共存を強く感じた。

〈フォーレの胸像への献花〉

丘の麓にはフォーレのレリーフがあり、パミエ市長と関係者臨席のもと、日本フォーレ協会から花束を献呈した。



〈市庁舎での歓迎レセプション〉

市長の歓迎の挨拶とシャンパンによるレセプション。パミエ市のレリーフとフォーレの胸像を頂いた。



〈フォーレ生誕地音楽協会による公式昼餐会〉

ホテルのレストランでのメニュー《フォーレを巡る物語Ballade autour de Gabriel Faué》を頂きながら、親睦を深めた。



〈聖アントナン教会のオルガンとカリヨン見学〉

私自身は歌う直前であったので行けなかった。カリヨン carillon (ドイツ語ではグロッケンシュピール glockenspiel) は、複数の鐘を組み合わせた楽器で中世のヨーロッパ、現在のベルギー～オランダ地方で生まれた古い楽器である。現在でもベルギーやオランダでは盛んだが、フランスで聴かれることは滅多にない。末永理恵子、末吉保雄両会員がカリヨン奏者のクリスティーン・ロージー氏の演奏を聴くという貴重な体験を得た。末吉会員は、カリヨンの演奏と、その夫君であるオルガン奏者ロージー氏のオルガン演奏へのお礼として、オルガンの新曲を捧げることを約束したとのこと。このような形で文化の友好が発展するのは音楽協会同士の交流としては理想的といえる。

〈演奏会〉

ノートル・ダム・デュ・カン教会は街の中心地に位置する。フォーレはこの教会で洗礼を受けた。パイプ・オルガンはあるが、ピアノはもろろないので、コン

サートのために運び込んでいる。教会の席数は500席くらいだろうか。だいたい7割方客がはいったようだ。フォーレの少年時代と変わらない荘厳さであろう。残響が多く演奏には多少の工夫が必要であった。



8. 2003年の音楽祭の概要

日本でよく知られている国際的な音楽祭は、7～8月の夏期休暇のころ集中的に行うことが多いので、音楽祭といえばそのようなものかと思う人が多いかもしれないが、実際には小規模の音楽祭も含めれば、一年中いろいろなところでたくさん行われている。週末ごとに行われることもあるし、何ヶ月にわたって行われることもよくある。クラシックだけでなくジャズ、現代音楽、ロックなどの音楽祭もある。その地域での事情にあうやり方で、無理なく運営しているのである。主に地元の聴衆を対象にするのであれば、夏期休暇にこだわることはない。2003年のパミエの音楽祭では5月から10月までの間に計7回のコンサートが行われた。以下がその主な内容である。

5/23 オベール・デュヴァル・フォルテック社の工場 (金属工業の会社であるが、工場内に音楽会場になるスペースがあるのだろう)

スヴェトリン・ルセヴ (ヴァイオリン) ジャン＝マルク・ルイサダ (ピアノ)

モーツァルト: ヴァイオリンとピアノのためのソナタ K379、フォーレ: パヴァーヌ、子守歌、フランク: ヴァイオリンとピアノのためのソナタ他

5/30 ノートル・ダム・デュ・カン教会

アンヌ・ケフェレック (ピアノ)

モーツァルト: ソナタ K333、ドビュッシー: 水の反映、オンディーヌ他、ラヴェル: 大海の小舟他

6/13 フォワのモンゴズィおよびパミエにおける 1er RCP (第一落下傘部隊 Premier Régiment de Chasseurs Parachutistes 駐屯地)

ワルトシュタイン・トリオ
モーツァルト：トリオ KV548、フォーレ：トリオ他

9/26 ノートルダム・デュ・カン教会 日本フォーレ協会のコンサート

10/10 聖アントニオ大聖堂
マリ＝クレール・アラン（オルガン）
J.S. バッハ：ファンタジア BWV572 他

10/17 カルメル修道院礼拝堂 バロック・コンサート
ヤン・ヴィレム・ヤンセン（クラヴサン）フランソワ・フェルナンデス（ヴァイオリン）
ステファニー・レヴィダ（ソプラノ）
モンドンヴィル：聖書によるカンタータ他

9. 音楽祭の後援者たち

パミエ市議会、アリエージュ県議会をはじめ、〈南地中海農業銀行 Crédit Agricole Sud Méditerranée〉、トゥールーズの新聞社である〈南フランス通信 La dépeche du midi〉世界的なスーパーマーケット〈カルフル Carrefour〉、また、建物の修復などを扱う〈Correa Frère 社〉や、〈アリエージュ新聞 Le journal de l'Ariège〉、など地元の企業が多くバックアップしている。個人でもフォーレの縁戚であるドミニク・フォーレ氏のように大きく寄与している人物をはじめ、市の有力者がバックアップしている。チケット代が13ユーロすなわち約1,700円（2005年6月1日現在）で運営できるのも、行政や企業の大きな理解と助成があるからだろう。

特筆すべきはこの音楽祭における音楽会場の多様さである。その中にはいわゆるコンサート・ホールはない。教会や、企業の工場、なんと軍隊の施設も利用している。もちろん音響を考慮すれば、その方がよい場合もあるであろう。しかしそれらは、音楽祭の支援として会場を提供されているのだ。企業の経営者や落下傘部隊の連隊長もプログラムの裏面に協力者として名前を連ねていることからそれがわかる。まさにいろいろな人たちの協力でこの音楽祭は成り立っているのだ。フランスの地方の小都市で本格的なコンサート・ホールを持っているところは少ない。日本でいえば小さな文化センター規模のものしかないところも普通である。しかし教会や城館、学校などを使ったりして、工夫をすることでかえって地元の住民には身近なコンサートとなり得ているようだ。

ところでフォーレ生誕地音楽協会はアソシエーション法 Association Loi（1901年成立）に基づきアソ

シエーションとして登録されている。この法律はいわゆるNPO(Non Profit Organization)法である。協会は営利を目的としない市民団体として行政、地元企業や商店、個人のヴォランティア（＝文字どおり意志による志願）に支えられ運営されている。行政は文化事業として、企業はメセナとして、個人は意志による社会貢献として音楽祭に関わるしくみである。パミエに限らず、フランスでは営利的な興行を除き、たいいてい音楽祭はアソシエーションによって運営されている。市民レヴェルの社会活動には必ずといっていいぐらい、アソシエーションが組織されているのだ。フランス人の8割近くが何らかのアソシエーションに参加して社会活動に携わっているという。このことは自由に集い行動するという、市民としての権利の行使の実現の現れであろう。フランスにおけるNPO(Non Profit Organization)法は日本に先んじること約100年前に制定された。アソシエーションの種類は芸術に限らず、多岐にわたっている。

スポーツ関係：24.5%

文化・観光・娯楽：23%

衛生・福祉関係 16.5%

社会生活：9.5%

住まい・環境：9.5%

教育・訓練 8.5%

企業へのサービス：8.5%

（1990年国立統計局による国政調査「市民のアソシエーション」コリン・コバヤシ著より）

アソシエーションの財政上の基本点は大まかにあげれば、経営の非営利、収益の不配分である。経営に携わる委員は基本的に無給であり、収益はアソシエーションの活動事業に還元される。収益事業を行わないアソシエーションは法人税の対象とならない。基本的には教育、文化、社会関係の事業を行っているアソシエーションに対しては非課税であり、またコンサートなどを行ってもそれらの入場料が売上総額の10%を超えない限り非課税である。もちろん芸術事業に対する寄付金も非課税である。同じ法人でも営利を追求する企業とは本質的に違いがある。そこには資本主義社会が成立する前の、人間との関わりとしての社会活動が根本にある。営利を追求する「交換」の経済活動の論理のみでは社会生活の営みは不十分だと、欧米の市民社会は本能的に覚ったかのように、高度化する資本主義のなかでますますアソシエーションは、重要な存在となり、近年ますます活動が活発化している。

★日本のNPO法との類似の点もあるが、決定的な相違点は、フランスのアソシエーション法には結社の自由が与えられていることが前提となっていることである

う。たとえアソシエーションの目的が違法であったとしても、アソシエーションの存在自体は禁じられていない。法的効力を持たないだけである。日本のNPO法は、宗教の教義を広め、儀式行事を行い、及び信者を教化育成することを主たる目的とするものでないこと、政治上の主義を推進し、支持し、又はこれに反対することを主たる目的とするものでないこと。というように、宗教・政治結社は最初から除外されている。

10. 終わりに

フランスのパミエ市における音楽祭への日本フォーレ協会の参加は成功裡に終わった。私はヨーロッパに住んでいたころ、いろいろなフェスティバルに参加した経験はあるのだが、今回のように、日本からの長い交渉を含めた参加は初めてであった。本当に多くの方々の協力により日本フォーレ協会初の海外公演が実現したのだ。単なる市民団体である両音楽協会が手を携えたことの意義は大きい。今度は日本にもフォーレ生誕地音楽協会を招待するなどして、この関係のより大きな発展と、日本フォーレ協会の海外での活動を広げていくことを願っている。

参考文献

- 『評伝フォーレ』ジャン・ミシェル・ネクトゥー 大谷千丈訳 新評論 2000
『フォーレ手帖 11号』日本フォーレ協会 2000
『フォーレ手帖 13号』日本フォーレ協会 2002
『フォーレ手帖 15号』日本フォーレ協会 2004
『市民のアソシエーション』コリン・コバヤシ編著 太田出版 2003
『フォーレゆかりの土地を訪ねて』金原礼子 音楽之友社 1997